

『周書』蕭☒伝に関する一考察-蕭☒の遣使称藩を手がかりとして-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院文学研究科 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 会田, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7472

蕭督の「遣使称藩」に関する一考察
——『周書』に描かれた蕭督像をめぐって——

On “Sending forth an Emissary and then Offering Subordination” by
Xiao-Cha : Concerning the Image of Xiao-Cha in the Zhoushu

会田 大輔

一、はじめに

後梁は、梁の雍州刺史蕭督（梁の武帝の孫）が西魏の支援を受けて、恭帝二年（555）に江陵で樹立し、隋の開皇七年（587）まで、三代三十三年にわたって存続した傀儡政権である⁽¹⁾。この後梁について、山崎宏氏・李万生氏は、北周の南朝対策の重要な柱であり、北周の後背地の安定に貢献したとしている⁽²⁾。また、王光照氏・張国安氏は、後梁の成立によって長江上中流域が北周の影響下に入り、南朝に対する軍事的優位が確定したことを指摘している⁽³⁾。さらに吉川忠夫氏は、後梁が北周に服属したことから、旧梁領を支配する正当性が北周にある、という主張がなされたことを指摘している⁽⁴⁾。他にも大内文雄氏は後梁帝室と仏教の関係について詳細に論じている⁽⁵⁾。

この後梁を建国した蕭督は、『周書』卷四八（以下、本稿では『周書』蕭督伝と呼ぶ）・『北史』卷九三に立伝されており、許高撰『建康実録』・馬綏撰『通歴』などでも梁の皇帝として取り上げられている⁽⁶⁾。『周書』蕭督伝は、この蕭督を「英雄の志・霸王の略有り」と賞賛するとともに、傀儡となったことを嘆く蕭督の姿を記録している。また、蕭督が西魏の傀儡となるきっかけとなった遣使称藩（遣使して属国となることを申し出ること）について、梁での内訌に敗れ、蕭繹（梁の元帝）に圧迫された結果、太清三年（549）十一月ごろに仕方なく西魏に遣使称藩したとしている。いわば、『周書』蕭督伝は、歴史の流れに翻弄された結果、西魏の傀儡になったという受動的な蕭督像を描き出しているのである。

これに対し、蕭督を西魏の傀儡政権となって命を永らえた売国奴である、と感情的評価を下している研究者も存在している⁽⁷⁾。しかし、後梁を取り上げた従来の研究の多くは、基本的に『周書』の蕭督像に従っている⁽⁸⁾。

しかし、蕭督が西魏の傀儡となるきっかけを作った遣使称藩に関する『周書』の記述には、その遣使時期について不審な点が存在し、当時の実態をそのまま伝えているようには見えないのである。後梁を取り上げた従来の研究は、この蕭督の遣使称藩時期については批判的検討を加えていない。また、蕭督の遣使称藩後に行われた西魏の漢東（現在の湖北省北部）進攻について言及した研究でも、この問題にはふれていない⁽⁹⁾。

近年、『周書』などの正史に唐朝の意向が働いていることを指摘した論稿が発表されており⁽¹⁰⁾、

その史実性を疑う必要性が明確になってきている。かりに、梁での内訌に敗れた結果、やむを得ず西魏に遣使称藩したという『周書』の記事が、事実でないとするならば、従来の蕭愔像も変わってくるように思われる。また、何故『周書』が蕭愔の遣使時期について明確にしていないのかという疑問も生じてくる。

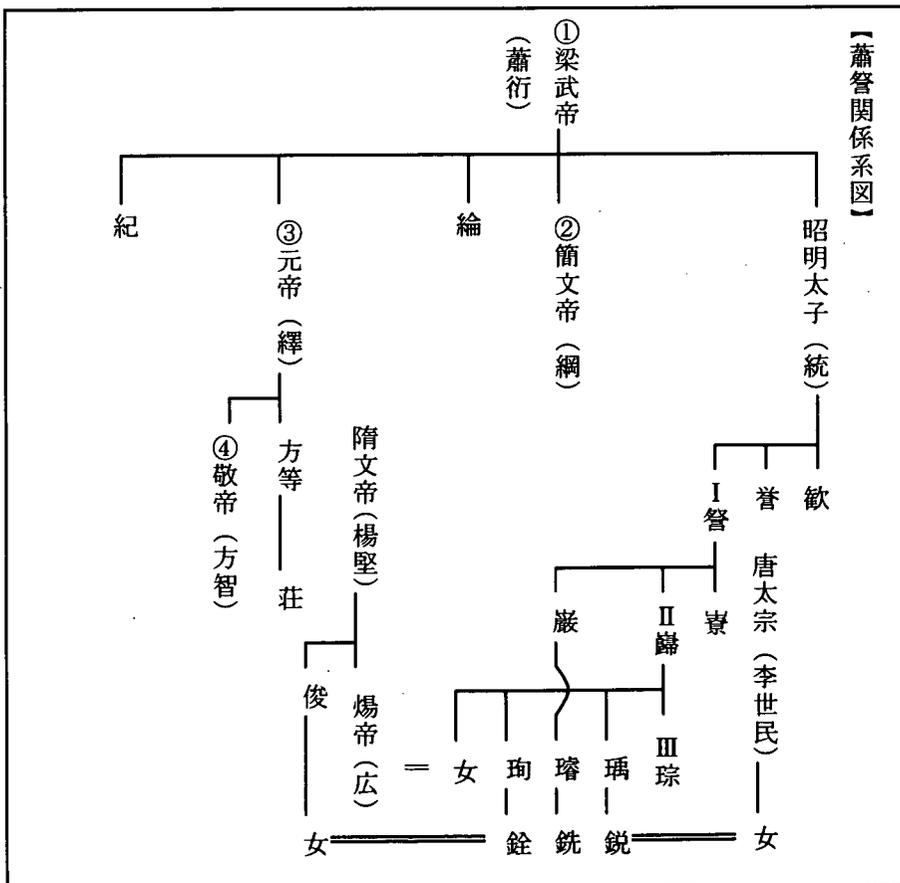
本稿ではこの点を踏まえ、蕭愔の遣使称藩時期の分析を通じて、『周書』蕭愔伝の描く蕭愔像について再検討していきたい。

二、蕭愔の遣使称藩時期について

1、蕭愔と梁の内訌

まず本節では遣使称藩時に蕭愔が置かれていた状況を改めて確認しておきたい。

蕭愔は梁の武帝の長子蕭統（昭明太子）の第三子である。昭明太子が中大通三年（531）に没すると、武帝は昭明太子の弟である蕭綱を皇太子とした⁽¹¹⁾。これによって蕭愔は、武帝に反感を抱くようになった⁽¹²⁾。その後、蕭愔は東揚州刺史となり、中大同元年（546）には都督雍州等諸



軍事に任命され、襄陽に赴任した⁽¹³⁾。彼は襄陽が重要拠点であるとともに梁の武帝が挙兵した地であることから、善政を布いて戦乱に備えた⁽¹⁴⁾。

太清二年（548）八月、東魏より梁に亡命していた侯景が叛乱を起こし、十月に首都建康が包囲されると、各地から救援軍が召集された⁽¹⁵⁾。この時、武帝の第七子蕭繹（後の元帝）は荊州刺史として江陵におり、昭明太子の次子蕭譽（蕭督の兄）は湘州刺史として長沙にいた。荊州諸軍事の蕭繹は、蕭督及び蕭譽に対し建康救援のために出陣するよう促したが、蕭督は勢力温存をはかって動かず、蕭督の兄蕭譽も蕭繹の指示に従わなかった。このため、蕭繹と蕭督・蕭譽の対立は深まっていった⁽¹⁶⁾。

太清三年（549）三月に建康と侯景の間で和議が結ばれると蕭繹は江陵に還り、六月に軍勢を長沙に派遣し、蕭督軍と衝突した。知らせを受けた蕭督は、蕭繹が蕭督の配下と内通工作をしていたこともあって大いに怒り⁽¹⁷⁾、蕭繹との全面対決に踏み切った。八月末頃、蕭督が蕭督に援軍を求めたため、蕭督は九月に江陵を攻撃した。『周書』蕭督伝には、

督時以譽危急、乃留諮議參軍蔡大寶守襄陽、率衆二萬・騎千匹伐江陵以救之。于時江陵立柵、周遶郭邑、而北面未就。督因攻之。……督既攻柵不尅、退而築城。又盡銳攻之。會大雨暴至、……衆頗離心。其將杜岸・岸弟幼安及其兄子龕、懼督不振、以其屬降於江陵。督衆大駭、其夜遁歸襄陽。

督、時に譽の危急なるを以て、乃ち諮議參軍蔡大寶を留めて襄陽を守らしめ、衆二萬・騎千匹を率いて江陵を伐ちて以て之を救わんとす。時に江陵柵を立て、郭邑を周遶するも、北面は未だ就かず。督、因りて之を攻む。……督、既に柵を攻めて尅てず、退いて城を築く。又た鋭を盡して之を攻む。會ま大雨暴至し、……衆頗る離心す。其の將杜岸・岸の弟幼安及び其の兄の子龕、督の振わざるを懼れ、其の屬を以て江陵に降る。督の衆大いに駭き、其の夜襄陽に遁歸す。

とあり、二万の兵を率いて江陵を攻撃し、一時蕭督軍が優勢だったが、杜氏一族（杜則・杜岸等）がそろって蕭繹に寝返ったため撤退せざるをえなくなったことが記されている⁽¹⁸⁾。この後、蕭督は襄陽に戻り、襄陽を攻撃した杜岸を撃破し、部下の尹正・薛暉に追撃させ、同年十一月に広平において杜氏一族を捕えて処刑した⁽¹⁹⁾。一方、蕭督を撃退した蕭繹は、同年十一月に司州刺史柳仲礼を派遣し襄陽を攻撃させている。

2、西魏の対梁政策の転換

続いて本節では、蕭督の遣使称藩前後における西魏の対梁政策の転換について再確認しておきたい。蕭督が西魏の傀儡となるきっかけを作った遣使称藩は、西魏の対梁政策の転換と密接な関係を有しているからである。

西魏前半期の対梁政策については前島佳孝氏の研究⁽²⁰⁾によって、大統二年（536）七月に通交が成立し、西魏の南進政策は凍結されたが、大統十二年（546）頃より荊州の軍備を強化する傾向がみられ、西魏の南進政策が復活したことが明らかになっている。

しかし、西魏の南進政策が本格的に進められるようになったのは、大統十四年（548）八月に、梁で侯景の乱が発生した後のことである。西魏は梁の混乱に乗じ南進政策を推進し、領土を大幅に拡大した。その第一歩となった戦役が漢東進攻である。『周書』卷二・文帝紀下・大統十五年の条には次のようにある。

初、侯景自豫州附梁、後遂度江、圍建業。梁司州刺史柳仲禮以本朝有難、帥兵援之。梁竟陵郡守孫暠舉郡來附。太祖使大都督符貴往鎮之。

初め、侯景豫州より梁に付き、後遂に江を度り、建業を圍む。梁の司州刺史柳仲禮、本朝に難有るを以て、兵を帥いて之を援く。梁の竟陵郡守孫暠、郡を舉げて來附す。太祖、大都督符貴をして往きて之に鎮せしむ。

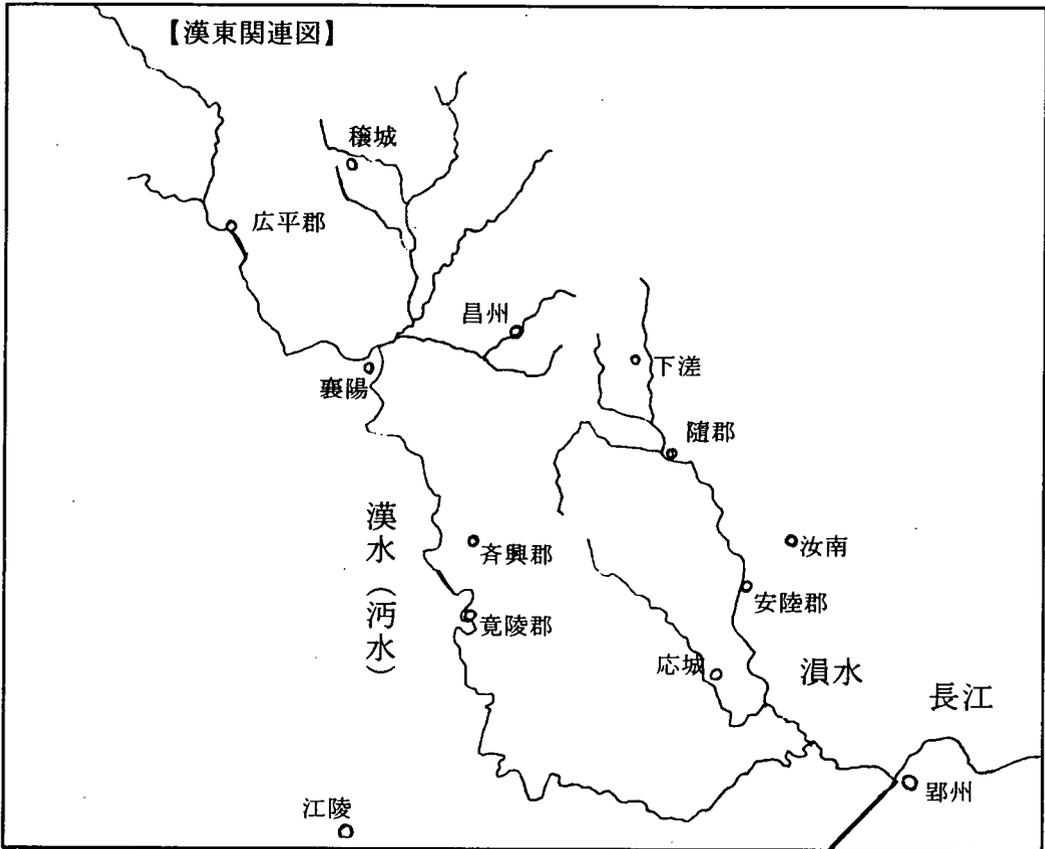
これにより、侯景の乱が発生し、梁の司州刺史柳仲禮が建康に援軍に赴いた大統十四年（548）十二月以後に、竟陵郡守の孫暠が西魏に降伏し、宇文泰が大都督符貴を派遣していることがわかる。また、『周書』卷十九・楊忠伝には、

時侯景渡江、梁武喪敗。其西義陽郡守馬伯符以下澁城降。朝廷因之、將經畧漢・沔、乃授忠都督三荆二襄二廣南雍平信隨江二郢浙十五州諸軍事、鎮穰城。以伯符爲鄉導、攻梁齊興郡及昌州、皆克之。

時に侯景江を渡り、梁武喪敗す。其の西義陽郡守馬伯符、下澁城を以て降る。朝廷之に因り、將に漢・沔を經畧せんとし、乃ち忠に都督三荆二襄二廣南雍平信隨江二郢浙十五州諸軍事を授け、穰城に鎮せしむ。伯符を以て鄉導と爲し、梁の齊興郡及び昌州を攻め、皆な之に克つ。

とあり、侯景の乱発生後に義陽郡守（西は衍字）馬伯符が降伏したことを受け⁽²¹⁾、漢東に進攻するため、楊忠を都督荊州諸軍事に任命したことが記されている。『資治通鑑』では、馬伯符降伏の記事を太清三年（549）十一月の条に繋げている。このことから、楊忠が都督荊州諸軍事になったのは、大統十五年（549）十一月前後であると思われる⁽²²⁾。この年には、長孫儉も東南道行台僕射に任命され再び荊州に出鎮している⁽²³⁾。これらのことから、侯景の乱発生後の大統十五年（549）十一月頃に、西魏の南進政策が明確化したことがわかる。

都督荊州諸軍事となった楊忠は、義陽郡守馬伯符を先導とし、梁の齊興郡及び昌州を攻略した。上述したように、馬伯符の降伏が大統十五年（549）十一月であることから、齊興郡・昌州攻略も十一月頃に行われたと考えられる。齊興郡も昌州も襄陽（雍州）周辺に置かれていた⁽²⁴⁾。当時、都督雍州諸軍事であった蕭管は、侯景の乱発生時にも襄陽にとどまっていた。しかし、蕭管が楊忠による齊興郡・昌州攻略に対して、どのような反応を示したか、史料上に一切記述がない。



ここで注目すべき史料が、『周書』卷十九・楊忠伝の荊州諸軍事就任に続く、次の記事である。

以伯符爲郷導、攻梁齊興郡及昌州、皆克之。梁雍州刺史岳陽王蕭督雖稱藩附、而尚有貳心。忠自樊城觀兵於漢濱、易旗遞進。實騎二千、督登樓望之、以爲三萬也、懼而服焉。

伯符を以て郷導と爲し、梁の齊興郡及び昌州を攻め、皆な之に克つ。梁の雍州刺史岳陽王蕭督、藩附（属国）を稱すると雖も、尚お貳心有り。忠、樊〔穰〕城より漢濱に觀兵し、旗を易えて遞進せしむ。實は騎二千、督、樓に登り之を望み、以て三萬なりと爲し、懼れて服す。

ここでは齊興郡・昌州攻略の記事に続けて、梁の雍州刺史蕭督が藩を称したにも関わらず未だに二心を抱いていたが、荊州（穰城）⁽²⁵⁾より出立する楊忠の策略（兵数を多く見せかける策略）にかかって、恐れて服したことが記されている。この記事から、この時既に蕭督が藩を称しており、楊忠による齊興郡・昌州の攻略を黙認していたことがわかる。このことは、蕭督の遣使称藩が大統十五年（549）十一月ごろに行われた楊忠の齊興郡・昌州攻略より前になされたことを意味している。では、蕭督が西魏に遣使称藩したのは、一体いつのことなのだろうか。

3、蕭督の遣使称藩時期

第一節で見たように、梁の太清三年（549）六月の時点で蕭督は蕭繹と対立していた。また第二節でみたように西魏の大統十五年（549）十一月の時点で、蕭督は西魏に遣使称藩していたことがわかった。では、一体、蕭督はいつ西魏へ遣使称藩したのだろうか。

従来の研究は例外なく蕭督の遣使称藩時期について、江陵から撤退した後の太清三年（549）十一月に、独力で蕭繹に対抗するすべがないと考えて西魏に遣使称藩したとしている⁽²⁶⁾。中でも吉川忠夫氏は、太清三年（549）十一月の柳仲礼による襄陽攻撃を受けて、西魏に称藩を申し出て、それを受けて西魏の使者榮権が襄陽を訪れ、その帰りに世子暕と妻王氏を人質として西魏に連れ帰り、楊忠らが派遣されたとしている⁽²⁷⁾。確かに『周書』蕭督伝の記述に素直に従うならば、
盡誅諸杜宗族親者。……督既與江陵構隙、恐不能自固、大統十五年、乃遣使稱藩、請爲附庸。太祖令丞相府東閣祭酒榮權使焉。督大悅。是歲、梁元帝令柳仲禮率衆進圍襄陽。督懼、乃遣其妻王氏及世子暕爲質以請救。

盡く諸の杜宗族親者を誅す。……督既に江陵と隙を構え、自固する能わざるを恐れ、大統十五年、乃ち使を遣わして藩を稱し、附庸と爲らんことを請う。太祖、丞相府東閣祭酒榮権をして焉に使わしむ。督大いに悦ぶ。是の歳、梁元帝、柳仲禮をして衆を率いて進みて襄陽を圍らしむ。督懼れ、乃ち其の妻王氏及び世子暕を遣わし質と爲し以て救を請う。

太清三年（549）十一月の杜氏処刑後に、独力で蕭繹（元帝）に対抗するすべがないため、西魏に遣使称藩したかのように見える。しかし、『周書』蕭督伝には遣使称藩の正確な月日は一切記されていないのである。さらに言えば、『周書』蕭督伝では蕭督の遣使称藩だけでなく、蕭督の江陵攻撃の時期すらも明確にしていない。蕭督の江陵攻撃が太清三年（549）九月に行われたことは、『梁書』などの関連箇所を見れば一目瞭然であるにも関わらず、『周書』蕭督伝では太清二年（548）の記事として蕭督の江陵攻撃を記しているのである。そして、江陵攻撃の記事の後に、蕭督の遣使称藩が「大統十五年（549）」に行われたとわざわざ記しているのである。この『周書』蕭督伝の記述だけを見ると、蕭督の江陵攻撃と西魏への遣使称藩が別の年に行われたかのような印象を受けてしまうのである。

『周書』卷二・文帝紀下も、大統十六年（550）三月条に蕭督の遣使称藩の記事を掲げ、

先是、梁雍州刺史・岳陽王督與其叔父荊州刺史・湘東王繹不睦、乃稱藩來附、遣其世子暕爲質。

是れより先、梁の雍州刺史・岳陽王督と其の叔父荊州刺史・湘東王繹と睦まず、乃ち藩を稱して來附し、其の世子暕を遣わし質と爲す。

その遣使時期については、「先是」という表現で記録しており、正確な遣使時期を記していない。そればかりでなく、『周書』卷二六・長孫儉伝や『隋書』卷七九・外戚伝附蕭歸伝、『南史』卷八・梁本紀下でも蕭督の遣使称藩の記事は見えるものの、その遣使時期は明確にされていないのである⁽²⁸⁾。

また、『周書』蕭督伝では、杜氏を破った記述の後に、「督既に江陵と隙を構え」と記し、既に蕭繹と戦闘状態に陥っているにも関わらず、不和を引き起こす意味の「構隙」という熟語を使用している。この表現は、戦闘状態に陥る前に用いるべき言葉である。同様に上に掲げた『周書』文帝紀でも蕭督と蕭繹との関係を「不睦」と記している⁽²⁹⁾。

このように、『周書』蕭督伝・文帝紀などでは、蕭督の遣使称藩の時期を一切記していないだけでなく、敢えて遣使時期を不明瞭にする記述がなされているのである。

かりに本当に江陵撤退後の十一月に蕭繹に圧迫されて、西魏に使者を派遣したのであったならば、その時期を明確にしてもいいはずである。果たして本当に蕭督は太清三年（549）十一月に遣使称藩したのだろうか。

ここで注目すべき記事が『周書』卷二八・権景宣伝にある。

仍留鎮荊州、委以鷄南之事。初、梁岳陽王蕭督將以襄陽歸朝、仍勒兵攻梁元帝於江陵。督叛將杜岸乘虚襲之。景宣乃率騎三千、助督破岸。督因是乃送其妻王氏及子崧入質。景宣又與開府楊忠取梁將柳仲禮、拔安陸・隨郡。

仍りて留まりて荊州に鎮し、委ぬるに鷄南の事を以てす。初め、梁の岳陽王蕭督、將に襄陽を以て歸朝せんとし、仍りて兵を勒し梁の元帝を江陵に攻む。督の叛將杜岸、虚に乗じて之を襲う。景宣乃ち騎三千を率いて、督を助け岸を破る。督、是に因りて乃ち其の妻の王氏及び子崧を送り質に入れる。景宣又た開府楊忠と梁將柳仲禮を取り、安陸・隨郡を抜く。

この権景宣伝には、蕭督が梁元帝（蕭繹）を攻める前に帰朝しようとしており、蕭督を裏切った杜岸が太清三年（549）九月に襄陽を攻撃すると、権景宣が兵を出して蕭督を支援したことが記されている。

いくら蕭督と蕭繹との関係が悪化していたとしても、西魏の一将軍が要請もないまま勝手に蕭督を支援することはありえない。この『周書』権景宣伝の記述から、蕭督の遣使称藩が江陵進攻以前の大統十五年・太清三年（549）九月前後になされたという結論が見えてくる。実際、西魏との交渉なしで、西魏と国境を接している襄陽を空けて江陵に進攻するという事態が起こりうるだろうか。『周書』蕭督伝に、

督時以警危急、乃留諮議參軍蔡大寶守襄陽、率衆二萬・騎千匹伐江陵以救之。……杜岸之降也、請以五百騎襲襄陽。

督、時に警の危急なるを以て、乃ち諮議參軍蔡大寶を留めて襄陽を守らしめ、衆二萬・騎千匹を率いて江陵を伐ちて以て之を救わんとす。……杜岸の降るや、五百騎を以て襄陽を襲うを請う。

とあるように、腹心である蔡大宝を留めていったとはいえ、叛將の杜岸がわずか五百騎で襄陽を攻撃していることから、襄陽の防備は相当貧弱なものだったと考えられる。このような貧弱な防

衛体制では、かりに西魏と交渉していなかったならば、西魏の進攻を許してしまい、みすみす襄陽を与えてしまうことになりかねない。蕭督がほぼ無防備で襄陽を守らせていたことから、当時、蕭督が西魏の支援を期待できる状況にあったことをうかがわせる。

では、蕭督が二度目の遣使を行い、人質を派遣したのはいつであろうか。この点については、『周書』蕭督伝に見える以下の記事を信頼してよいと思われる。

梁元帝令柳仲禮率衆進圍襄陽。督懼、乃遣其妻王氏及世子暕爲質以請救。

梁元帝、柳仲禮をして衆を率いて進みて襄陽を圍らしむ。督懼れ、乃ち其の妻王氏及び世子暕を遣わし質と爲し以て救を請う。

蕭繹は蕭督の江陵撤退後、柳仲礼に襄陽攻撃を命じたが、柳仲礼は様子を見てすぐには進撃せず⁽³⁰⁾、十一月になって安陸に長史馬岫を置いて襄陽に進攻した。その際、西魏に降っていた竟陵郡の孫暕は再び梁に帰属しており、柳仲礼は彼と王叔孫を竟陵に置いて守らせている。これにより、襄陽の東南（安陸郡）と南方（竟陵郡）が蕭繹側につき、襄陽は半包囲状態に陥ったのである。この事態を受けて、蕭督は再び西魏に遣使して夫人の王氏と嫡子の暕を人質に出し、救援を求めたものと思われる。

西魏はこの蕭督の支援要請を受けて、楊忠・権景宣・泉仲遵・裴果らを派遣して漢東に進攻し、まず随郡を攻略し、翌大統十六年（550）正月に安陸を攻略した⁽³¹⁾。この時安陸の守将で、先に楊忠に降った馬伯符の父である馬岫⁽³²⁾は、安州刺史に就任している⁽³³⁾。この後、楊忠は石城（竟陵郡の治所）まで進軍し、江陵を攻撃しようとしたが、蕭繹が子の方略を人質に出したことにより、石城・安陸を国境として和議を結んだのである⁽³⁴⁾。

本節での検討結果をまとめると次の二点のようになる。

- ①従来、蕭督の遣使称藩は、太清三年（549）九月の江陵攻撃に失敗した後、蕭繹の圧迫を受けて、十一月にやむを得ず行われたものとして理解されてきた。
- ②しかし、本節での検討により、蕭督は江陵攻撃前の太清三年（549）八月末から九月上旬に、襄陽の安全を図るために西魏に遣使称藩し、蕭繹が襄陽攻撃を企図したことにより、十一月に再び西魏に遣使して人質を出し、西魏の支援を求めたことが明らかとなった。

本章の検討結果を踏まえ、西魏の漢東進攻についてまとめると次頁の年表「西魏の漢東進攻関連年表」のようになる。

西魏は大統十五年（549）六月に、東魏に敗北を喫して潁川を失い、さらに大統十六年（550）九月にも東征に失敗し、洛陽以東を失っており、東方において新たな領土獲得は困難となっていた。西魏が領土拡大を図るためには、南進政策を推進する外なかったのである。

このように考えると、蕭督の遣使称藩が西魏にとって大きな意味を持っていたことが改めて確認できる。蕭督が西魏に遣使称藩した結果、西魏は蕭督を援助するという名目のもと漢東に進攻

【西魏の漢東進攻関連年表】

西暦	出来事
549 年前半?	竟陵郡守孫嵩、西魏に降伏。西魏、符貴を派遣。
6 月～8 月	蕭繹、蕭譽軍と衝突。蕭譽、蕭督に援軍を求む。
この頃	西魏、長孫儉を東南道行台僕射に任命。荊州に赴任 ⁽³⁵⁾ 。
8 月末～9 月上旬	蕭督、西魏に遣使称藩。西魏、栄権を蕭督のもとに派遣。 *従来の研究では 11 月のこととする。
9 月上旬	蕭督、江陵を攻撃。杜氏一族が寝返って襄陽を攻撃したことにより撤退。 西魏の権景宣の支援を受けて、杜氏一族の攻撃を撃退。
11 月	蕭督の部下尹正・薛暉、広平において杜氏一族を捕獲・殺害。
11 月	蕭繹、柳仲礼を派遣し襄陽を攻撃。西魏に降伏していた孫嵩が再び梁に降伏。蕭督、西魏に人質を送って救援を求める。
11 月	西魏、楊忠を都督荊州諸軍事に任命し、蕭督を支援。馬伯符、楊忠に降伏。楊忠、斉興郡・昌州攻略。
12 月頃	楊忠等、随郡占領。
550 年正月	楊忠等、柳仲礼を捕え、安陸郡・竟陵郡を降伏させて、漢東制圧。
2 月	蕭繹、西魏と和睦。この後、西魏は蕭綸とも通交 ⁽³⁶⁾ 。
6 月～7 月	西魏、蕭督を梁王に封じ、蕭督、返礼として長安に赴く ⁽³⁷⁾ 。
8 月～9 月	蕭繹、蕭綸を攻撃 ⁽³⁸⁾ 。蕭綸、北斉に支援要請。北斉、蕭綸を梁王に封ずるも支援せず ⁽³⁹⁾ 。蕭繹軍に敗れた蕭綸は、汝南に逃亡 ⁽⁴⁰⁾ 。
9 月	西魏、東征に失敗。洛陽以東を失う。
9 月以降	蕭綸、西魏領竟陵攻撃を計画 ⁽⁴¹⁾ 。蕭繹これを西魏に連絡 ⁽⁴²⁾ 。
12 月	西魏、楊忠等を安陸の救援に派遣。
551 年 2 月	楊忠、汝南を攻撃し蕭綸を捕え殺害 ⁽⁴³⁾ 。権景宣、蕭綸に呼応した夏侯珍洽の拠る応城を攻略 ⁽⁴⁴⁾ 。

『周書』『梁書』『北斉書』『資治通鑑』を参照して作成。

する正当性を獲得したからである。この漢東進攻に成功したことによって西魏は南進政策推進の重要な足がかりを掴んだ。以後西魏は積極的に南進政策（漢川・四川・江陵進攻）を推進していくこととなる⁽⁴⁵⁾。これに対し、梁は襄陽を失い、長江中流域を危機にさらすこととなり、承聖三年（554）に江陵が陥落する遠因を作ってしまったのである。

ここで、何故『周書』が、西魏にとって意義のある蕭督の遣使称藩について、その時期を曖昧にし、蕭繹の攻撃を受けてやむを得ず遣使称藩したという事実とは異なった記述をしたのか疑問が生じてくる。この問題については章を改めて検討したい。

三、『周書』蕭督伝の叙述をめぐって

1. 『周書』蕭督伝からみた蕭督像

西魏に遣使称藩した後、蕭督は西魏の傀儡としての道を歩んでいくことになった。蕭督は西魏の恭帝元年（554）十二月に行われた西魏の江陵攻撃に参加し、翌年（555）正月、江陵において皇帝に即位し、後梁を建国することになる。しかし、蕭督が従来支配していた襄陽は西魏に接收され、後梁の領土は江陵周辺に限定されてしまった。皇帝号はその国内でのみ使用が許され、西魏に対しては臣と称さなければならなかった。また、

太祖乃置江陵防主、統兵居於西城、名曰助防。外示助督備禦、内實兼防督也。

太祖乃ち江陵防主を置き、兵を統べて西城に居し、名づけて助防という。外は督を助けて備禦するを示すも、内は兼ねて督を防ぐを實たすなり。 （『周書』蕭督伝）

とあるように西魏は後梁を監視するために江陵防主を置き、西魏の軍隊を駐留させたのである。

『周書』蕭督伝には、西魏の傀儡となったために、襄陽を失い、荒れ果てた江陵で自由に行動できないことを嘆く蕭督の様子が描かれている。

既而闔城長幼、被虜入關、又失襄陽之地。……又見邑居殘毀、干戈日用、恥其威畧不振、常懷憂憤。乃著愍時賦以見意。

既にして闔城の長幼、虜われて關に入り、又た襄陽の地を失う。……又た邑居殘毀にして、干戈日に用いらるを見て、其の威畧振るわざるを恥じ、常に憂憤を懷く。乃ち愍時賦を著し以て意を見わす。

そしてこれに続けて、吉川忠夫氏の表現を借りれば、「あたえられし運命の薄幸を慨嘆することに終始」⁽⁴⁶⁾している蕭督の「愍時賦」が掲載されている。この「愍時賦」の中で蕭督は、西魏への遣使称藩時の状況について、

既川岳之形勝、復龍躍之基趾。……值諸侯之攜貳、遂留滯於樊川。等勾踐之絶望、同重耳之終焉。

既に川岳の形勝にして、復た龍躍の基趾なり。……諸侯の攜貳するに値り、遂に樊川に留滯す。勾踐の絶望に等しく、重耳の終焉に同じ。

と述べ、襄陽が重要拠点（川岳の形勝）であり、且つ梁の武帝が挙兵した地（龍躍の基趾）であったにも関わらず、梁宗室の離反（諸侯の攜貳）に遭って、勾踐や重耳のように一時的に逼塞することになってしまった、と嘆いている。この蕭督の嘆きは、蕭繹の圧迫を受けてやむを得ず西

魏に遣使称藩した、という『周書』蕭督伝の記述と符合している。

また、『周書』蕭督伝の末尾では、蕭督が憂憤のあまり没したと述べている。

督疆土既狭、居常怏怏。……未嘗不盱衡扼腕、歎咤者久之。遂以憂憤發背而殂。

督、疆土既に狭く、常に居ること怏怏たり。……未だ嘗て盱衡扼腕せずんばならず、歎咤すること之を久しくす。遂に憂憤を以て背に發して殂す。

これは、西魏の傀儡となってしまった蕭督の悲劇性を強調しているように思われる。さらに『周書』蕭督伝の論贊では、

史臣曰、梁主任術好謀、知賢養士。蓋有英雄之志、霸王之畧焉。及淮海版蕩、骨肉猜貳、擁衆自固、稱藩内款、終能據有全楚、中興頽運。雖土宇殊於舊邦、而位號同於曩日。貽厥自遠、享國數世、可不謂賢哉。

史臣曰く、梁主術を任い謀を好み、賢を知り士を養う。蓋し英雄の志・霸王の畧有ればなり。淮海版蕩し、骨肉猜貳するに及び、衆を擁して自固し、藩を稱して内款し、終に能く全楚を據有し、頽運を中興す。土宇は舊邦に殊なると雖も、位號は曩日に同じ。貽厥（子孫に残す謀）は自ら遠く、享國すること數世、賢と謂わざるべけんや。

と述べて、蕭督を「英雄の志・霸王の略有り」と高く評価し、梁が混乱に陥って宗室同士が争いあう状況になると、兵を擁して自立して西魏に遣使称藩し、最後には梁を中興したと称賛し、蕭督の遣使称藩を正当化している。

以上の記述をまとめれば、『周書』蕭督伝は、蕭督の遣使称藩に関する事実を糊塗しているだけでなく、蕭督伝の後半部分に「愍時賦」を掲載し、さらに論贊部分で蕭督を称賛することによって、西魏の傀儡となった蕭督の行動を正当化しているのである。

2. 『周書』蕭督伝の叙述をめぐって

では、何故『周書』は蕭督の遣使称藩に関する記述を糊塗してまで、蕭督の行動を正当化しようとしたのだろうか。劉知幾が『史通』内篇卷七・曲筆で、

自梁陳已降、隋周而往、諸史皆貞觀年中羣公所撰、近古易悉、情偽可求。至如朝廷貴臣、必父祖有傳、考其行事、皆子孫所爲、而訪彼流俗、詢諸故老、事有不同、言多爽實。

梁陳自り已降、隋周而往、諸史皆な貞觀年中、羣公の撰する所、近古は悉し易く、情偽は求むべし。朝廷の貴臣の如きに至りては、必ず父祖に傳有り、其の行事を考うるに、皆な子孫の爲す所にして、彼の流俗を訪ね、諸を故老に詢えば、事は同じからざる有り、言は多く實に爽う。

と述べているように、唐初に編纂された『周書』などの正史史料には、朝臣や撰者の祖先に対する曲筆が数多くみられる⁽⁴⁷⁾。『周書』蕭督伝が蕭督の正当化を図っていることも、この『史通』

の指摘と関係があるように思われる。なぜなら、『周書』の編纂者の一人である岑文本は、後梁に仕えた岑善方の孫であり⁽⁴⁸⁾、岑文本自身も隋末唐初の群雄で、荊州に割拠した後梁宗室（蕭愔の曾孫）の蕭銑に仕えているからである。

郡舉秀才、以時亂不應。蕭銑僭號於荊州、召署中書侍郎、專典文翰。

郡、秀才に擧げるも、時亂を以て應じず。蕭銑、荊州に僭號するや、召して中書侍郎に署し、専ら文翰を典らしむ。（『旧唐書』卷七十・岑文本伝）

この蕭銑政権は、『旧唐書』卷五六・蕭銑伝に、

義寧二年、僭稱皇帝、署置百官、一準梁故事。……武德元年、遷都江陵、修復園廟。

義寧二年（618）、皇帝を僭稱し、百官を署置すること、一に梁の故事に準ず。……武德元年（618）、江陵に遷都し、園廟を修復す。

とあるように、梁（後梁）の復興をうたって、その制度を採用していた⁽⁴⁹⁾。岑文本は隋には仕官しなかったにも関わらず、蕭銑政権には仕えており、蕭銑政権に対して消極的であった様子は窺えない。これらのことから、岑文本は隋よりも後梁に対する愛着をもち続けていたように思われる。

劉知幾の『史通』によると、隋代に編纂された『周紀』にも蕭愔伝があり、『周書』蕭愔伝の全てが唐代に書かれたかどうか不明である⁽⁵⁰⁾。しかし、『周書』の編纂に後梁系である岑文本が関与している以上、『周書』蕭愔伝は岑文本によって執筆されたとみてよいだろう。

岑文本は後梁系官僚として、また祖父岑善方の顕彰を図るためにも、後梁の歴史を正当化しなければならなかったと思われる。しかし、そればかりでなく、蕭愔の孫である蕭瑀が高祖・太宗に仕えていたことも影響しているように思われる。

蕭瑀は、後梁二代目皇帝蕭巋（明帝）の子であり、後梁三代目皇帝蕭琮の弟である。姉は隋の煬帝の皇后であり、蕭瑀の妻独孤氏は李淵の母の同族であり、蕭瑀の子銳は太宗の娘襄城公主を降嫁されている⁽⁵¹⁾。他にも妹は「八柱国」の侯莫陳崇の孫に嫁いでおり⁽⁵²⁾、甥の銓は煬帝の姪（秦王俊の娘）を娶っている⁽⁵³⁾。このように隋唐代において蕭瑀の一族は、南朝系の名門として存在していただけでなく、隋唐宗室や胡族系元勳とも深い婚姻関係を結んでいたのである⁽⁵⁴⁾。唐末に李冗によって書かれた小説集『独異志』卷上には、

唐蕭瑀、嘗因内燕。上曰「自知一座最貴者、先把酒。」時長孫無忌・房玄齡等相顧未言。瑀引手取盃。帝問曰「卿有何説。」瑀曰「臣是梁朝天子兒、隋朝皇后弟、尚書左僕射、天子親家翁。」太宗撫掌、極歡而罷。

唐の蕭瑀、嘗て内燕に因る。上曰く「自ら一座の最も貴たるを知れる者、先ず酒を把れ」と。時に長孫無忌・房玄齡等相顧みて未だ言わず。瑀、手を引き盃を取る。帝問いて曰く「卿、何の説か有らんや」と。瑀曰く「臣は是れ梁朝天子の兒、隋朝皇后の弟、尚書左僕射、天子の親家翁たり」と。太宗掌を撫し、歡を極して罷む。

とあり、太宗が最も高貴な家柄であると自負している者は酒を取れと言った際に、長孫無忌・房玄齡等がしりごみする中、蕭瑀が「私は梁帝の子・隋煬帝の皇后の弟・尚書左僕射・太宗の姻戚である」と述べて酒をとった、という逸話が残されている。事実であるかどうかはさておき、蕭瑀の強い名族意識を象徴しているように思われる。

この蕭瑀は隋末に河池郡守となり、李淵に帰属して民部尚書ついで内史令に就任し、その後尚書左僕射・御史大夫などを歴任した。『旧唐書』卷六三・蕭瑀伝には、

初、瑀之朝也、關内産業並先給勳人。至是特還其田宅、瑀皆分給諸宗子弟、唯留廟堂一所、以奉蒸嘗。

初め、瑀の朝するや、關内の産業並びに先に勳人に給う。是に至り特に其の田宅を還す。瑀、皆分ちて諸宗の子弟に給し、唯だ廟堂一所のみを留め、以て蒸嘗を奉ず。

とあり、隋末唐初の混乱で接収された田宅を返還された際に、蕭氏一族に分け与え、廟堂のみを留めたことが記されている。これは、唐初において蕭瑀が蕭氏一族の領袖格であったことを示している⁽⁶⁵⁾。おそらく、蕭瑀はその血統・地位などから、蕭氏一族のみならず、後梁系官僚の領袖格であったと思われる。

岑文本はこの後梁系官僚の領袖である蕭瑀のためにも、後梁の建国者蕭愔を顕彰し、その名誉を守る必要があったと思われる。蕭愔が襄陽保全のため自らの意志で西魏に遣使称藩した事実を直筆してしまうと、蕭愔に対する倫理的批判が発生しかねない。そのため、岑文本は蕭愔の称藩時期を曖昧にし、蕭繹に迫られて仕方なく西魏に使者を派遣したと曲筆し、蕭愔の遣使称藩を正当化することで、後梁の正当化を図ったものと思われる。

四、終わりに

本稿で検討してきたことをまとめると、以下ようになる。

- ①『周書』は、蕭愔の遣使称藩について正確な月日を示さず、蕭愔が江陵攻撃に失敗した後に、蕭繹が柳仲礼を派遣して襄陽攻撃を図ったため、仕方なく遣使称藩したものとして記述していた。しかし、『周書』の記述を再検討した結果、蕭愔は江陵攻撃前の太清三年（549）九月ごろに、襄陽の保全を図って自発的に西魏に遣使称藩していたことが明らかとなった。
- ②『周書』蕭愔伝は、蕭愔の遣使称藩に関する記述を糊塗するだけでなく、蕭愔伝の後半部分に「愔時賦」を掲載し、さらに論贊部分で蕭愔を称賛することによって、蕭愔の悲劇性を強調するとともに、蕭愔の行動を正当化していた。
- ③『周書』の編纂者であった岑文本は、後梁に仕えた祖父のみならず、後梁系官僚の領袖ともいえる蕭瑀の祖父蕭愔を顕彰するため、蕭愔の遣使称藩に関する記述を糊塗し、後梁の正当化を図った。

以上の三点から、『周書』蕭詧伝に見える蕭詧像は、『周書』編纂時に岑文本によって作り上げられた可能性の高いことがわかった。『周書』などの正史を読む際には、些細な部分であっても、朝臣や撰者の祖先に対する曲筆にも注意しなければならないのである。

しかし、ここで注意しなければならないのは、『周書』が唐朝によって編纂されたという事実である。確かに本稿での検討や『史通』の指摘に見えるように、唐初に編纂された正史には朝臣の父祖に対する曲筆が多く見られる。しかし、このことを単なる個人的な曲筆として片付けてしまっていいのだろうか。唐朝が政治的思惑によって、積極的に正史中の朝臣の父祖に対する曲筆に関わっていた可能性も考えられるのではないだろうか。

『周書』などの正史が編纂された貞観年間、『貞観氏族志』の編纂に代表されるように、家格の再編成が行われていた。この『貞観氏族志』は貞観六年（632）に編纂が命じられ、一度は完成したのだが、唐室李氏を第三等としたため再編纂が命じられ、同十年（636）に『周書』などの正史が完成するのを待って、同十二年（638）に完成したものである。再編纂された『貞観氏族志』は、家格の首位に唐室李氏、次席に外戚（竇氏・長孫氏）を位置付け、唐室李氏を中心とする門閥序列を明示した。山下将司氏は、唐室李氏の権威・正統性確立と『周書』の編纂に深い関わりがあることを既に指摘している⁽⁵⁶⁾。しかし、『周書』等の正史の編纂は、唐室李氏の権威確立のためだけに行われたわけではない⁽⁵⁷⁾。唐朝が『周書』などの正史を編纂した時期に、家格の再編成も行っていたことを考えると、『周書』などの正史編纂には、南北朝後半・隋代に活躍した人物の評価を決定付けることで、家格の再編成を促進する側面もあったのではないだろうか。

本稿で取り上げた蕭瑀は、既述したように南朝系官僚の中で唯一太宗の娘を降家されており、さらに後梁系官僚のみならず南朝系官僚の中で最も高位の官職に就任していた。いわば、南朝系官僚の中で特別な待遇を受けていたのである。また、『周書』のみならず『隋書』『南史』においても、蕭詧の事績が糊塗されていたことを踏まえると、蕭詧像の形成に、岑文本のみならず、唐朝が関与した可能性もあるように思われる。この問題については今後の課題としたい。

（明治大学文学研究科博士後期課程アジア史専修）

注

- （1）川勝義雄『中国の歴史3 魏晉南北朝』（講談社文庫、2003年、初出1974年）252・258頁、宮崎市定『大唐帝国 中国の中世』（中公文庫、1988年、初出1968年）304頁など参照。吉川忠夫氏は「かく後梁王朝は北周の附庸に終始し、北朝に利用されるにすぎない存在であった。すくなくとも政治的には負の存在理由しかもちえなかった」と述べている。吉川忠夫「後梁春秋—ある傀儡王朝の記録—」（『侯景の乱始末記—南朝貴族社会の命運—』中公新書、1974年）190頁参照。

- (2) 山崎宏「北朝末期の附庸国後梁に就いて」(『史潮』11-1、1941年)、李万生「読く周書・蕭督伝>書後」(『魏晉南北朝隋唐史』1999-1、初出1998年)、王光照「後梁興亡与南北統一」(『江漢論壇』1999-4) 参照。
- (3) 前掲注2 王光照「後梁興亡与南北統一」、張国安「淮南之役與陳代南人政治之重組」(『国学研究』5、1998年) 参照。
- (4) 前掲注1 吉川忠夫「後梁春秋」189頁参照。また、『周書』卷三九・杜杲伝には、保定二年(562)に北周が陳文帝の弟の陳頊を帰国させるかわりに魯山郡を手に入れた時の交渉の様子が記されている。その中に、「杲答曰「……況魯山梁之舊地、梁即本朝蕃臣、若以始末言之、魯山自合歸國。」(杲答えて曰く「……況や魯山は梁の舊地なり、梁は即ち本朝の蕃臣なり、若し始末を以て之を言わば、魯山自ら歸國に合う。)」とあり、後梁が北周の蕃臣であるので、梁の旧地は北周領であるという理論を展開している。
- (5) 大内文雄「六～七世紀における荊州仏教の動向」(『大谷学報』66-1、1986年) 参照。
- (6) このうち、許嵩撰『建康実録』が後梁を取り上げた理由については、安田二郎『『梁書』『陳書』及び『南史』に関する史料論的研究序説—許嵩とその撰述の書『建康実録』—』(平成12・13・14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2003年)34～38頁参照。
- (7) 呂思勉『兩晉南北朝史』(上海古籍出版社、1948年)上巻664頁、王仲犛『魏晉南北朝史』(上海人民出版社、1980年)上巻457頁参照。
- (8) 前掲注1 吉川忠夫「後梁春秋」、前掲注2 山崎宏「北朝末期の附庸国後梁に就いて」、前掲注2 李万生「読く周書・蕭督伝>書後」、前掲注2 王光照「後梁興亡与南北統一」 参照。
- (9) 趙丕承『五胡史綱』(藝軒図書出版社、2000年)中冊1086～87、1095～1105頁および牟發松『湖北通史 魏晉南北朝卷』(華中師範大学出版社、1999年)266～271頁参照。李万生氏は西魏の漢東進攻時における漢東諸勢力の動向について詳述している。李万生『侯景之乱与北朝政局』(中国社会科学出版社、2003年)126～130頁参照。
- (10) 前島佳孝「西魏・八柱国の序列について—唐初編纂奉勅撰正史に於ける唐皇祖の記述様態の一事例—」(『史学雑誌』108-8、1999年)、山下将司「唐初における『貞觀氏族志』の編纂と「八柱国家」の誕生」(『史学雑誌』111-2、2002年) 参照。
- (11) この時、武帝は批判をかわすために、昭明太子の子たちを大郡に封しており、蕭督は岳陽郡王に封じられた。『南史』巻五三・蕭統伝には「帝既廢嫡立庶、海内噂嗜、故各封諸子大郡以慰其心。(帝既に嫡を廢し庶を立て、海内噂嗜し、故に各諸子を大郡に封じ、以て其の心を慰む。)」とある。
- (12) 『周書』巻四八・蕭督伝には「督既以其昆弟不得爲嗣、常懷不平。又以梁武帝衰老、朝多秕政、有敗亡之漸、遂蓄聚貨財、交通賓客、招募輕俠、折節下之。其勇敢者多歸附、左右遂

至數千人。(督、既に其の昆弟嗣と爲るを得ざるを以て、常に不平を懷く。又た梁の武帝衰老し、朝に秕政多く、敗亡の漸有るを以て、遂に貨財を蓄聚し、賓客と交通し、輕俠を招募し、節を折りて之に下る。其の勇敢なる者多く歸附し、左右遂に數千人に至る。)」とある。

(13) 襄陽は北朝に対する最前線の防衛拠点であり、また南北貿易の重要拠点として、軍事・経済両面で非常に重要な都市であった。稲葉弘高「南朝に於ける雍州の地位」(『集刊東洋学』34、1975年)参照。

(14) 『周書』卷四八・蕭督伝には「督以襄陽形勝之地、又是梁武創基之所、時平足以樹根本、世亂可以圖霸功、遂克己勵節、樹恩於百姓、務修刑政、志存綏養。……於是境内稱治。(督、襄陽は形勝の地にして、又た是れ梁武創基の所にして、時平らかなれば以て根本を樹つるに足り、世亂れば以て霸功を圖る可しとし、遂に克己勵節し、恩を百姓に樹て、務めて刑政を修め、志綏養に存す。……是に於いて境内治を稱す。)」とある。

(15) 侯景の乱については、竹田龍兒「侯景の乱についての一考察」(『史学』29-3、1956年)、吉川忠夫「南風競わず一侯景の乱始末記一」(前掲注1『侯景の乱始末記』所収)、前掲注9李万生『侯景之乱与北朝政局』など参照

(16) この対立には、侯景の乱の直前に起きた張纘と蕭譽の湘州刺史交代をめぐるトラブルが影響している。張纘は湘州刺史から雍州刺史への転任が決まっていたが、後任の蕭譽を侮蔑したため、その怒りを買って湘州に抑留されてしまった。侯景の乱が発生すると張纘は、江陵の蕭繹の下に駆け込み、蕭督と蕭譽が手を結んで蕭繹を攻撃しようとしていると伝えて、蕭繹と蕭譽・蕭督の対立を煽ってしまったのである。『周書』卷四八・蕭督伝および『梁書』卷三四・張纘伝参照。

(17) 『周書』卷四八・蕭督伝には「初、梁元帝將援建業、……督遣府司馬劉方貴領兵爲前軍、出漢口。……而方貴先與督不協、潛與元帝相知、尅期襲督。未及發、會督以他事召方貴。方貴疑謀泄、遂據樊城拒命。(初め、梁元帝將に建業を援けんとし、……督、府司馬劉方貴を遣わし兵を領して前軍と爲し、漢口より出でしむ。……而して方貴、先に督と協わず、潜かに元帝と相い知り、期を尅め督を襲わんとす。未だ發するに及ばず、會ま督、他事を以て方貴を召す。方貴、謀泄を疑い、遂に樊城に據りて命を拒む。)」とある。この後、元帝は張纘を雍州刺史に任命して援軍を派遣したが、劉方貴は捕えられて殺害された。

(18) 蕭譽はその後も蕭繹に抵抗を続け、翌年の大宝元年(550)五月に捕えられ処刑された。『梁書』卷五・元帝紀および『梁書』卷五五・河東王譽伝参照。

(19) 『資治通鑑』卷一六二・梁紀十八・太清三年(549)十一月条参照。『周書』卷四八・蕭督伝には、蕭督が杜岸の近親を全て殺害し、父祖の墓を暴き遺骸を焼いたうえに、その頭骨で漆の椀を作ったことが記されている。後日談として『南史』卷六四・杜岸伝には「及建鄴平、

則兄弟發安寧陵焚之、以報漆腕之酷。元帝亦不責也。(建鄴平らぐに及び、則兄弟安寧陵を發き之を焚き、以て漆腕の酷に報ゆ。元帝も亦た責めざるなり。)」とあり、侯景の乱鎮圧後、杜氏が報復として昭明太子の墓(安寧陵)を暴いて焼き払ったことが記されている。

(20) 西魏前半期の対梁政策については、前島佳孝「賀拔勝の経歴と活動—西魏前半期の対梁外交と関連して—」(『東方学』103、2002年)、同「西魏・蕭梁通交の成立—大統初年漢中をめぐる抗争の顛末—」(『中央大学アジア史研究』26、2002年)参照。

(21) 『元和郡県図志』巻二四・山南道・随州・唐城県の条によると、下澧城は随郡(現在の湖北省随州)の西北に位置しており、義陽郡の治所からは離れている。李万生氏は、義陽郡が東魏の国境と接しており、自立し難い環境であったため、馬伯符は下澧城に拠って西魏に下ったのではないかとしている。また、馬伯符・孫嵩が西魏に降伏していることから、この時期の漢東地域が侯景の乱の影響を受けて動揺していたことを指摘している。前掲注9李万生『侯景之乱与北朝政局』128頁参照。

(22) 馬伯符の降伏をめぐって、『資治通鑑』と『周書』の間には若干の違いが存在する。『資治通鑑』巻一六二・梁紀十八・太清三年(549)・十一月の条には「魏楊忠將至義陽。太守馬伯符以下澧城降之。忠以伯符爲鄉導。(魏の楊忠將に義陽に至らんとす。太守馬伯符、下澧城を以て之に降る。忠、伯符を以て鄉導と爲す。)」とあり、馬伯符は楊忠が都督荊州諸軍事に就任して義陽に迫ったため、降伏したとしている。

(23) 「長孫儉神道碑」には、「十五年、更除東南道行臺僕射・都督十五州諸軍事、行荊州事。(十五年、更めて東南道行臺僕射都督・十五州諸軍事に除せられ、荊州の事を行う。)」とある。庾信撰・倪璠注・許逸民校点『庾子山集注』(中華書局、1980年)巻十三・周柱国大将軍拓跋儉神道碑参照。

(24) 齊興郡は梁の郢州下の郡。治所は上蔡。竟陵郡の北に位置していた。『南齊書』巻十五・州郡志下・郢州の条および『隋書』巻三一・地理志下・竟陵郡の条参照。昌州は北魏の南荊州のこと。治所は安昌。襄陽の東に位置する。普通四年(523)に梁に帰属していた。西魏の攻略後の廢帝三年(553)に昌州と改名した。『隋書』巻三一・地理志下・春陵郡および王仲犛『北周地理志』(中華書局、1980年)上巻480~481頁参照。

(25) 『周書』巻十九・楊忠伝は「樊城」より出兵したと記しているが、『太平御覽』巻二八八・兵部十九・機略七引用の『周書』楊忠伝では、「穰城」としている。当時、樊城は蕭督の居城であり、楊忠の居城は穰城であった。このことから、「穰城」が正しい。中華書局本『周書』巻十九・楊忠伝・注四五参照。

(26) 前掲注2山崎宏「北朝末期の附庸国後梁に就いて」、前掲注2李万生「読く周書・蕭督伝>書後」、前掲注2王光照「後梁興亡与南北統一」など参照。

- (27) 前掲注1 吉川忠夫「後梁春秋」160～161頁参照。
- (28) 蕭警の使者が荊州刺史の長孫儉を訪れた時の様子が、『周書』巻二六・長孫儉伝に記されている。しかし、その遣使時期については記されていない。また、『隋書』巻七九・外戚伝附蕭巋伝は「及繹嗣位、警稱藩于西魏、乞師請討繹。(繹、位を嗣ぐに及び、警、藩を西魏に稱し、師を乞い繹を討たんことを請う。)」とするのみで、蕭警の遣使称藩時期を明確にしていない。また、『南史』巻八・梁本紀下は「四月、剋湘州、斬警。湘州平。雍州刺史岳陽王警自稱梁王、蕃于魏。魏遣兵助伐襄陽。([大寶元年] 四月、湘州に剋ち、警を斬る。湘州平らく。雍州刺史岳陽王警自ら梁王を稱し、魏に蕃す。魏、兵を遣わし襄陽を伐つを助く。)」として、蕭警の遣使称藩を大寶元年(550)四月条に記している。ちなみに『梁書』には蕭警の遣使称藩に関する記述はない。
- (29) 『資治通鑑』巻一六二・梁紀十八・太清三年・十一月条は、「警既與湘東王繹爲敵。(警、既に湘東王繹と敵爲り。)」として「爲敵」と直接的な表現に改めている。
- (30) 『南史』巻三八・柳仲礼伝には「會岳陽王警南寇。湘東王以仲禮爲雍州刺史、襲襄陽。仲禮方觀成敗、未發。(會ま岳陽王警南寇す。湘東王、仲禮を以て雍州刺史と爲し、襄陽を襲わしむ。仲禮、方に成敗を觀て、未だ發せず。)」とある。
- (31) 柳仲礼は安陸陥落を恐れて襄陽攻撃を中止したが、安陸に引き返す途上で西魏軍に撃破され捕えられた。そして、安陸・竟陵も降伏し、漢東地域は尽く西魏領となった。『周書』巻十九・楊忠伝、『周書』巻四四・泉仲遵伝、『周書』巻三六・裴果伝、『南史』巻三八・柳仲礼伝参照。
- (32) 『周書』巻十九・楊忠伝には「馬岫以安陸降。王叔孫、孫暠、以竟陵降。皆如忠所策。(馬岫、安陸を以て降る。王叔孫、孫暠を斬り、竟陵を以て降る。皆な忠の策する所の如し。)」とある。また、『資治通鑑』巻一六二・梁紀十八・太清三年(549)・十一月の条には、馬伯符が楊忠に降ったという記事に続けて、「伯符、岫之子也。(伯符、岫の子なり。)」とある。
- (33) 『梁書』巻二九・蕭綸伝には「西魏安州刺史馬岫聞之、報于西魏。(西魏の安州刺史馬岫之を聞き、西魏に報ず。)」とあり、翌年の蕭綸による漢東攻撃に際し、馬岫が安州刺史であったことがわかる。また、馬岫は後梁とも関係を持っていたようである。唐代貞元八年(792)に作られた「馬炫墓誌」には「五代祖岫、梁安州刺史、西魏拔以授荊州刺史、後梁贈太尉・荊州牧、諡曰肅。(五代祖岫、梁の安州刺史、西魏拔きて以て荊州刺史を授け、後梁、太尉・荊州牧を贈り、諡して肅と曰う。)」とあり、馬岫が後梁によって贈官されたことが記されている。「馬炫墓誌」の拓本・録文については、李献奇・郭引強編著『洛陽新獲墓誌』(文物出版社、1996年)88・264頁参照。
- (34) 『資治通鑑』巻一六三・梁紀十九・大寶元年(550)・二月の条には「二月、魏楊忠乘勝至石城、欲進逼江陵。……忠遂停澧北。繹遣舍人王孝祀等送子方略爲質、以求和。魏人許之。」

繹與忠盟曰「魏以石城爲封、梁以安陸爲界、請同附庸、并送質子、質遷有無、永敦鄰睦。」忠乃還。(二月、魏の楊忠、勝に乗じて石城に至り、進みて江陵に逼るを欲す。……忠、遂に澧北に停む。繹、舍人王孝祀等を遣わして子の方略を送りて質と爲し、以て和を求む。魏人之を許す。繹、忠と盟して曰く「魏は石城を以て封と爲し、梁は安陸を以て界と爲し、請うらくは附庸と同じくし、並びに質子を送り、質遷の有無、永く鄰睦を敦くすることを。」と。忠、乃ち還る。)」とある。『南史』卷八・梁本紀下では正月のこととしている。

(35)『周書』卷二六・長孫儉伝には「又除行臺僕射・荊州刺史。時梁岳陽王蕭督内附、初遣使入朝、至荊州。(又た行臺僕射・荊州刺史に除せらる。時に梁の岳陽王蕭督内附し、初めて使を遣わし入朝し、荊州に至る。)」とある。蕭督の遣使が大統十五年(549)九月前後であることから、長孫儉が荊州に赴任したのはそれ以前のこととなる。

(36)『周書』卷二二・柳帶韋伝には「時侯景作亂江右。太祖令帶韋使江郢二州、與梁邵陵・南平二王通好。(時に侯景、亂を江右に作す。太祖、帶韋をして江郢二州に使わしめ、梁の邵陵(蕭綸)・南平(蕭恪)二王と通好す。)」とある。『梁書』卷二九・蕭綸伝には「大寶元年、綸至郢州、刺史南平王恪讓州於綸、綸不受、乃上綸爲假黃鉞・都督中外諸軍事。(大寶元年、綸、郢州に至り、刺史南平王恪、州を綸に讓る、綸受けず、乃ち綸を上して假黃鉞・都督中外諸軍事と爲す。)」とあり、蕭綸が郢州に赴任したのが大宝元年(550)であることがわかる。このことから、大統十六年(550)正月の漢東制圧以後、西魏と蕭綸が通交していたことがわかる。

(37)『周書』卷四八・蕭督伝には「十六年……時朝議欲令督發喪嗣位、督以未有聖命、辭不敢當。榮權時在督所、乃馳還、具言其狀。太祖遂令假散騎常侍鄭穆及榮權持節策命督爲梁王。(十六年……時に朝議、督をして喪を發し位を嗣がしめんと欲す、督、未だ聖命有らざるを以て、辭して敢えて當らず。榮權、時に督の所に在り、乃ち馳せ還り、具に其の状を言う。太祖、遂に假散騎常侍鄭穆及び榮權をして節を持たしめ督に策命して梁王と爲す。)」とあり、蕭督が自ら望まないのに梁王になったと記されている。蕭督が梁王になった時期は、『資治通鑑』卷一六三・梁紀十九・大宝元年(550)では、六月のこととしており、『南史』卷八・梁本紀下では四月のこととしている。

(38)蕭綸は、蕭繹が蕭督を攻撃するのを止めようとしたが果たせず、かえって蕭繹の攻撃を受けた。『梁書』卷四・簡文帝紀には「大寶元年、……八月甲午、湘東王繹遣領軍將軍王僧辯率衆逼郢州。……邵陵王綸棄郢州走。(大寶元年、……八月甲午、湘東王繹、領軍將軍王僧辯を遣わして衆を率いて郢州に逼らしむ。……邵陵王綸、郢州を棄てて走る。)」とある。『梁書』卷二九・蕭綸伝にも同様の記事がある。

(39)『北齊書』卷四・文宣帝紀には「九月癸丑……詔梁侍中・使持節・假黃鉞・都督中外諸軍

事・大將軍・承制・邵陵王蕭綸爲梁王。(九月癸丑……詔して梁侍中・使持節・假黃鉞・都督中外諸軍事・大將軍・承制・邵陵王蕭綸を梁王と爲す。)」とある。

(40) 『梁書』卷四・簡文帝紀には「二年春二月、邵陵王綸走至安陸董城、爲西魏所攻、軍敗、死。(二年春二月、邵陵王綸、走りて安陸董城に至り、西魏の攻むる所と爲り、軍敗れ、死す。)」とある。これにより、汝南が安陸董城のことであることがわかる。

(41) 『周書』卷十九・楊忠伝には「綸北度、與其前西陵郡守羊思達要隨・陸土豪段珍寶・夏侯珍洽、合謀送質於齊、欲來寇掠。汝南城主李素、綸故吏也、開門納焉。(綸、北に度り、其の前西陵郡守羊思達と隨・陸の土豪段珍寶・夏侯珍洽を要め、合謀して質を齊に送り、來りて寇掠せんと欲す。汝南城主李素、綸の故吏なり、門を開いて納れる)」とある。

(42) 『周書』卷十九・楊忠伝には「梁元帝密報太祖、太祖乃遣忠督衆討之。(梁元帝密かに太祖に報じ、太祖乃ち忠を遣わし衆を督し之を討たしむ。)」とある。

(43) 『梁書』卷二九・蕭綸伝には「西魏遣大將軍楊忠・儀同侯幾通率衆赴焉。二年二月、忠等至于汝南。綸嬰城自守。會天寒大雪。忠等攻之不能克。死者甚衆。後李素中流矢卒、城乃陷。忠等執綸。綸不爲屈、遂害之、投于江岸。(西魏、大將軍楊忠・儀同侯幾通を遣わし衆を率いて焉に赴かしむ。二年二月、忠等、汝南に至る。綸、嬰城して自守す。會ま天寒く大いに雪ふる。忠等、之を攻めて克つ能わず。死する者甚だ衆し。後に李素、流矢に中りて卒し、城乃ち陥つ。忠等綸を執う。綸、屈を爲さず、遂に之を害し、江岸に投ず。)」とある。

(44) 『周書』卷二八・權景宣伝には「隨州城民吳士英等殺刺史黃道玉、因聚爲寇。……景宣執而戮之、散其黨與。進攻應城、拔之、獲夏侯珍洽。於是應・禮・安・隨並平。(隨州の城民吳士英等、刺史黃道玉を殺し、聚に因りて寇を爲す。……景宣執えて之を戮し、其の黨與を散ず。進みて應城を攻め、之を抜き、夏侯珍洽を獲える。是に於いて應・禮・安・隨並びに平らぐ。)」とある。

(45) 漢川進出については前島佳孝「西魏の漢川進出と梁の内訌」(『大学院研究年報』〈中央大・文学研究科〉28、1998年)参照。四川進出については前島佳孝「西魏の四川進攻と梁の帝位闘争」(『大学院研究年報』〈中央大・文学研究科〉29、2000年)参照。また、趙文潤「西魏宇文泰伐蜀滅梁戰役述略」(『北朝研究』第一輯、北京燕山出版社、2000年)は西魏の一連の南進政策について概説している。

(46) 前掲注1 吉川忠夫「後梁春秋」171頁。

(47) 岳純之『唐代官方史学研究』(天津人民出版社、2003年)63頁および劉知幾著・西脇常記訳注『史通内篇』(東海大学出版会、1989年)参照。

(48) 『旧唐書』卷七十・岑文本伝には「岑文本、字景仁、南陽棘陽人。祖善方、仕蕭警吏部尚書。……又先與令狐德棻撰周史、其史論多出於文本。(岑文本、字は景仁、南陽棘陽の人。祖

- 善方、蕭警に仕えて吏部尚書たり。……又た先に令狐德棻と周史を撰し、其の史論多く文本より出づ。)とある。岑善方の伝は『周書』卷四八・蕭警伝に附されており、そこには「尋遷散騎常侍・起部尚書。善方性清慎、有當世幹能、故警委以機密。(尋いで散騎常侍・起部尚書に遷る。善方性は清慎にして、當世の幹能有り、故に警委ぬるに機密を以てす。)」とある。
- (49) 『旧唐書』卷五六・蕭銑伝の訳注は、氣賀澤保規訳注「隋末唐初の諸叛乱」(谷川道雄・森正夫編『中国民衆叛乱史1 秦～唐』平凡社、1978年)に収められている。
- (50) 『史通』内篇卷二・世家篇には「牛弘周史、南記蕭警。(牛弘の周史、南は蕭警を記す。)」とある。
- (51) 『旧唐書』卷六三・蕭瑀伝には「子銳嗣、尚太宗女襄城公主。(子銳嗣ぎ、太宗の女襄城公主を尚す。)」とある。『新唐書』卷百一・蕭瑀伝も同様。
- (52) 『隋書』卷七九・蕭琮伝には「琮曰「前已嫁妹於侯莫陳氏」(琮曰く「前に已に妹を侯莫陳氏に嫁がしむ。)」とある。また、侯莫陳崇の孫である侯莫陳毅の墓誌に「夫人蘭陵縣君蕭氏、梁世祖明帝之第七女也。……遭家不造、隨昆季於秦京。爰降敕書、言歸右族。(夫人蘭陵縣君蕭氏、梁の世祖明帝の第七女なり。……家の不造に遭い、昆季に秦京に隨う。爰に敕書を降し、言に右族に歸す。)」とある。「侯莫陳毅墓誌」については、吳綱主編『全唐文補遺 千唐誌齋新藏專輯』(三秦出版社、2006年)7～8頁参照。
- (53) 『統高僧伝』卷三八・釈慧銓伝には「釋慧銓。姓蕭氏、今特進宋公瑀之兄子也。父仕隋爲梁公。祖即梁明帝矣。……帝乃尚以秦孝王女爲妻。(釋慧銓。姓は蕭氏、今の特進宋公瑀の兄の子なり。父〔瑀〕は隋に仕えて梁公と爲る。祖は即ち梁の明帝なり。……帝乃ち尚するに秦孝王の女を以て妻と爲す。)」とある。
- (54) 愛宕元「隋末唐初における蘭陵蕭氏の仏教受容—蕭瑀を中心にして—」(福永光司編『中国中世の宗教と文化』京都大学人文科学研究所、1982年)参照。
- (55) 前掲注 54 愛宕元「隋末唐初における蘭陵蕭氏の仏教受容—蕭瑀を中心にして—」は、唐初において蕭瑀が「蕭氏一族の族長的立場に置かれていた」と指摘している。
- (56) 『貞観氏族志』については、前掲注 10 山下将司「唐初における『貞観氏族志』の編纂と「八柱国家」の誕生」参照。
- (57) 雷家驥氏は、『周書』等の正史編纂について、地域矛盾・政治意識対立の解消を目指す唐朝の政策を反映したものであることを指摘している。雷家驥『中古史学觀念史』(学生書局、1990年)528頁参照

付記：本稿は平成18年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。